

2008.10.15

2009.9.8 追記

照査例 鉄筋コンクリート橋脚（杭基礎）（平成 19 年 10 月初版第 1 刷） 正誤表

頁	誤	正
p6-9	軸力変動を考慮した場合，11.4.4 (5) の杭の軸力変動において $M_{yd} > M_{crd}$ となるので，上記条件を満足する．	軸力変動を考慮した場合， <u>11.4.2 (7)</u> の杭の軸力変動において $M_{yd} > M_{crd}$ となるので，上記条件を満足する．
P6-10	表 6.2.1 軸力変動を考慮した場合の M_{crd} ， M_{yd} および図 6.2.1 $M-N$ 相関	添付資料記載
p6-22	(12) 片持ち梁の用心鉄筋の配置【RC 標準 13.3.4 解説(3)】 ディープビームの側面には，片面でコンクリート断面積の 0.08% 以上の鉛直の用心鉄筋を腹部幅の 2 倍以下かつ 300mm 以下の間隔で配置する。 単位幅 (m) 当り $A_{ss} = (2300 \times 1700) \times 0.0008 = 3128 \text{ mm}^2$ これをスターラップとすれば， D22-100mm 間隔 $A_{sI} = 3871 \text{ mm}^2$ よって，上記条件を満足する．	(12) 片持ち梁の用心鉄筋の配置【RC 標準 13.3.4 解説(3)】 ディープビームの側面には，片面でコンクリート断面積の 0.08% 以上の鉛直および水平の用心鉄筋を腹部幅の 2 倍以下かつ 300mm 以下の間隔で配置する。 <u>$A_{ss} = (2300 \times 1700) \times 0.0008 = 3128 \text{ mm}^2$</u> <u>D22 を 9 本以上 (D22 \times 9 : $A_{sI} = 3484 \text{ mm}^2$)，または，D25 を 7 本 (D25 \times 7 : $A_{sI} = 3547 \text{ mm}^2$) 以上，鉛直および水平方向に配置すればよいため，</u> 上記条件を満足する．
p6-22	また，コーベル部材でもあるため，一般に梁の両側に，引張鉄筋の 40% 以上の水平の用心鉄筋を，300 mm 以下の間隔で配置する．	また，コーベル部材でもあるため，一般に梁の両側 <u>あわせて</u> ，引張鉄筋の 40% 以上の水平の用心鉄筋を，300 mm 以下の間隔で配置する．

<p>P10-9 P10-10</p>	<p>(d) 照査結果</p> $\sigma_s = M_d / (A_s \cdot j \cdot d) - N_d / A_s$ <p>A_s : 軸方向鉄筋量 (=60359.2mm²)</p>	<p>(d) 照査結果</p> $\sigma_s = M_d / (A_s \cdot j \cdot d) - N_d / \underline{A_s'}$ <p>$\underline{A_s'}$: 軸方向鉄筋量 (=60359.2mm²)</p>
<p>P10-18 P10-19</p>	<p>(d) 検討結果</p> $\sigma_s = M_d / (A_s \cdot j \cdot d) - N_d / A_s$ <p>A_s : 軸方向鉄筋量 (=60359.2mm²)</p>	<p>(d) 検討結果</p> $\sigma_s = M_d / (A_s \cdot j \cdot d) - N_d / \underline{A_s'}$ <p>$\underline{A_s'}$: 軸方向鉄筋量 (=60359.2mm²)</p>
<p>p10-22</p>	<p>表 10. 1. 25 検討結果 橋軸方向，く体基部の永久＋変動作用時の設計せん断力 0.0</p>	<p>表 10. 1. 25 検討結果 橋軸方向，く体基部の永久＋変動作用時の設計せん断力 <u>659.0</u></p>
<p>p10-23</p>	<p>10 章 地震時以外の照査 10.2 杭</p>	<p>10 章 地震時以外の照査 10.2 杭</p> <p>基礎構造物の設計は「基礎標準 (H12)」に基づき限界状態設計法により行う。ただし、杭などの基礎のコンクリート部材の各限界状態の検討（照査）は、「鉄道構造物等設計標準・同解説（コンクリート構造物）」改訂に伴う関連技術基準の対照表」（(財) 研友社 HP： https://www.kenf.jp/book/doc/concrete_taisho.htmlにて公開）により、「RC 標準 (H4)」から「RC 標準 (H16)」に読み替える必要がある。ここでは、杭く体の検討のうち、終局限界状態に対する検討について示す。鉛直支持力の検討については、本照査例の付属資料に示す。</p>

p10-23	10.2.1 安全性の照査	10.2.1 <u>終局限界状態の検討</u> 「鉄道構造物等設計標準・同解説（コンクリート構造物）」改訂に伴う関連技術基準の対照表より、場所打ち杭の杭く体の終局限界状態の検討（照査）については「RC 標準 7 章 安全性の照査」に準じて行う。なお、作用の組み合わせおよび応答値の算定は「基礎標準（H12）」によるものとする。
p10-28～10-29	10.2.2 復旧性の照査	10.2.2 復旧性の照査 ⇒ <u>全て削除</u>
p11-20	(5) 杭の軸力変動	<u>(7)</u> 杭の軸力変動

添付資料

表 6.2.1 軸力変動を考慮した場合の M_{crd} , M_{yd}

軸力 $N'd$ (kN)	曲げモーメント	
	M_{crd} (kN・m)	M_{yd} (kN・m)
-2614.3	0.0	73.6
-2251.9	0.0	141.5
-1889.5	0.0	210.8
-1527.1	23.8	313.0
-1164.7	72.2	420.5
-834.3	116.4	515.9
-503.9	160.5	608.0
-173.6	204.6	696.7
156.8	248.8	782.0
487.2	292.9	863.9
817.6	337.1	942.4
1148.0	381.2	1017.3
1478.4	425.3	1088.5
1796.5	467.8	1153.2
2114.6	510.3	1214.4
2432.7	552.8	1272.1
2750.8	595.3	1326.6
3068.9	637.8	1377.5
3387.0	680.3	1422.6
3705.1	722.8	1461.4
4387.5	814.0	1521.7
5069.9	905.2	1565.1
5752.3	996.4	1574.9
6434.8	1087.5	1562.2
7117.2	1178.7	1532.4
7799.6	1269.9	1471.5
8482.0	1361.1	1383.2
9164.4	1456.4	1277.4
9846.8	1365.3	1154.2
10529.3	1274.1	0.0

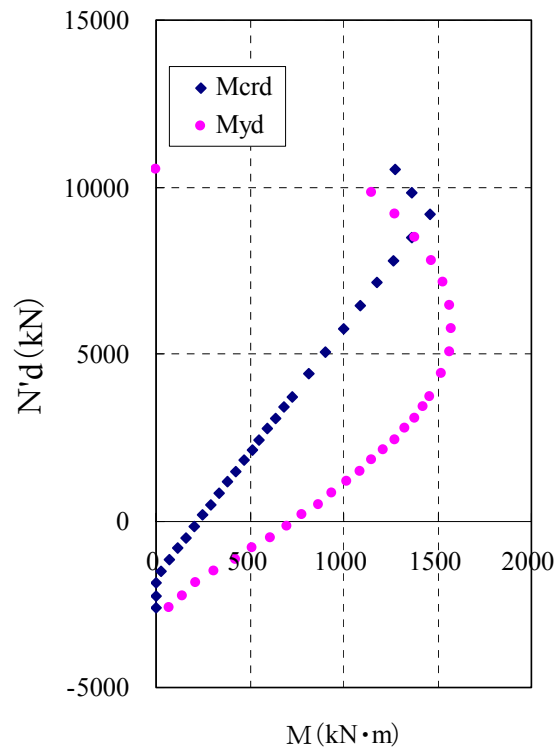


図 6.2.1 $M-N$ 相関